

海外インターンシップ報告書

平成 26 年 10 月 20 日提出

氏名	田村 友和
所属	大学院獣医学研究科 動物疾病制御学講座 微生物学教室
学年	博士課程 3 年
活動先名	OIE Sub-Regional Representative for South-East Asia、タイ王国
期間（出発日―帰札日）	2014 年 8 月 3 日-8 月 29 日

・活動目的及びインターンシップ先を選択した理由

筆者の活動目的は、OIE の Sub-Regional Representative for South-East Asia (OIE SRR-SEA) にて国際機関が実施する家畜疾病の制御方策を、主に東南アジア地域での口蹄疫撲滅へ向けたプロジェクトに参加することで習得することである。

筆者は、博士課程の研究でウイルス感染症の制御に向けた基礎研究を遂行しており、また人獣共通感染症専門家コースを専攻している。筆者は、博士課程修了後も基礎研究に携わり、感染症制御に貢献する仕事をしたいと考えている。しかし、実際の現場で感染症制御を指揮するのは必ずしも「科学者」ではなく、国際機関あるいは行政機関の「行政官」であることが多い。将来、筆者が基礎研究を推進し感染症制御に貢献する成果を現場に還元、あるいはその分野の専門家として提言をするに当たって実際の指揮官の姿勢や考え方を学ぶことは、「正しく貢献する」術を身につけることにつながり、今後のキャリアに大きく貢献するものと考えた。そこで筆者は、WHO Western Pacific Regional Office (WPRO) にて本年 7 月 20 日から 8 月 16 日にインターンシップをするため、4 月 14 日に LP 運営委員会へ申請し、4 月 16 日に承認を受けた。WPRO には事前に感染症のサーベイランス部門を訪問しており、筆者の目的に適うものと考えた。

申請前は受け入れ先の快諾を得ていたが、承認後に上記の日程での受け入れの難色を WPRO 側が示したため、派遣時期および期間の変更を視野に交渉し、調整を進めていた。しかし、5 月 12 日に WPRO 側が申請者の希望期間および日程で今回は受け入れないと通達したため、申請者は断念することとした。そこで、同等の知識および経験を得られる国際機関を模索し交渉を進めた結果、OIE-SRR でインターンシップを実施することとなった。

・活動内容・成果（2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい）

OIE SRR-SEA は、2010 年にタイ王国のバンコク市に設立された東南アジアを管轄する OIE の準地域事務所である。その前身は、1997 年に設立された OIE Regional

Coordination Unit for SEAFMD である。この SEAFMD (South East Asia Foot and Mouth Disease) は、東南アジア諸国における口蹄疫のコントロールおよび撲滅に向けたプログラムである (現在は、このプログラムに中国が参加し、SEACFMD という呼称を使用している)。そのため OIE-SRR は、SEACFMD とタイアップして口蹄疫の撲滅に向けたプログラムを中心に活動をおり、その他狂犬病のコントロールプログラムを実施している (プログラムは活動費用を拠出している国に依る)。

OIE SRR-SEA でのインターンシップを実施する前に、OIE の組織、役割および口蹄疫についての基礎的な知識を補填するため、動物衛生研究所の国際重要伝染病研究領域 (動衛研)、OIE Regional Representative for Asia and the Pacific (OIE RR-AP)、農林水産省 (農水省) に訪問して、「事前研修」を行うこととした。動衛研では、坂本研一領域長をはじめ先生方に口蹄疫の学術的知識、基礎研究および同研究領域が OIE RR-AP と実施しているラオスにおける口蹄疫ワクチンプログラムについて、OIE RR-AP では、石橋朋子次席代表および口蹄疫のプロジェクトの責任者である Dr. Chantane Buranathai に OIE の組織、役割および口蹄疫プロジェクトについてご教授頂いた。農水省では、川島俊郎主席獣医官と面会し、その後平成 26 年度第 1 回の OIE 連絡協議会に参加して OIE の役割について理解を深めた。

筆者は、バンコクに到着した翌日に 12th Meeting of the MTM Tri-State Commission に参加するため、タイ南部ハジャイ市に向かった。ハジャイ国際空港にて初めて今回受け入れて頂いた OIE SRR-SEA の代表である Dr. Ronello Abila、直接指導を受けた Dr. Karanvir Kukreja をはじめ、OIE SRR-SEA のスタッフと面会した。その日は会場のホテルにて会議の設営に関わった。この会議は、ミャンマー、マレーシアおよびタイの 3 カ国がそれらの国境を接する領域を口蹄疫撲滅に向けた特定地域とし、OIE SRR-SEA が主導で 2~3 年に一度会議を開催して、進行状況の確認およびロードマップを見直すというものである。会議には各国から主席獣医官、National Coordinator (NC) および関係する獣医師が参加した (集合写真, 写真 1)。OIE SRR-SEA が準備したプログラムに基づいてそのスタッフが、OIE の規約にある口蹄疫のコードといった基礎的な講演、各国からの現在の状況報告、また現在のロードマップ状況を把握するためにアンケートを用いた演題も含まれていた。会議の中でも、口蹄疫がその特定地域で発生した場合の対応およびリスク分析を行うワークショップは、各国の関係者が限られた時間の中で話し合い、回答を作成し、OIE SRR-SEA の疫学分野の解析を担当する Dr. Barbara Tornimbene が助言をするもので非常に実践的で筆者にとって大変興味深かった。その会議の夜には参加者全員を対象とした晩餐会が設けられ、交流を深める機会となった。最終日には、検疫所および農場に訪問し、実際に現地の口蹄疫対策の現状を把握することが出来た (写真 2)。

翌週と翌々週の2週間は、バンコク市にある OIE SRR-SEA のオフィス (写真3) で 17th SEACFMD National Coordinators Meeting (下記参照) に向けた資料作成に携わった。その1つは、Dr. Kukreja が主導で進めている口蹄疫プロジェクトに関する発表で、SEACFMD 参加国から集められた口蹄疫の発生状況を地図上にプロットするという単純な作業であったが、膨大なデータ量と不慣れなソフトウェアの使用で苦労した (写真4)。また、筆者は Dr. Tornimbene のリスク解析に関するプロジェクトにも携わり、彼女から口蹄疫のリスク解析についてその実例を基に教えて頂いた。筆者が一番苦労した課題は、開催される会議の1ワークショップの準備だった。ワークショップで使用するアンケートの作成であったが、何度もスタッフに修正され、完成したのは会議が実施される直前だった。しかし、きめ細やかな助言を頂き、また OIE SRR-SEA のスタンスを学ぶ良い機会となったと思う。それ以外の活動として、Dr. Mary Joy Gordoncillo が主導で進めているフィリピンでの狂犬病ワクチンプログラムについてその進行状況および課題を Dr. Kukreja と共に議論した。実際の生データの解析に携わることができ、それはラボ出身の筆者にとって親しみやすく、貢献することが出来た活動だったと思う。

最終週には、タイ北部のチェンライ市で開催された 17th SEACFMD National Coordinators Meeting に参加した。この国際会議には、各国の NC に加えて OIE 本部の担当者、OIE-RR-AP から Dr. Buranathai、FAO の関係者、またオーストラリアのマードック大学およびニュージーランドのマッセイ大学の疫学チームの先生が出席した。会議の中でもロードマップの改訂については各国から様々な意見が飛び交い、非常に活発な議論だった。

今回のインターンシップは1ヶ月間という短い期間であったため、プロジェクトの責任者として携わることは出来なかった (Dr. Abila からプロジェクトを充てがわれるためには3ヶ月間は最低必要と伺っている)。しかし、筆者は口蹄疫撲滅へ向けたプロジェクトに参加することで「国際機関」が各国をまとめ、疾病制御の旗振り役として働く重要性を学ぶことが出来たと思う。



写真1: OIE主催の国際会議での集合写真 (筆者は右端)



写真2: 農場の視察 (NCの質問に応じる農場主)



写真3: OIE SRR-SEAのオフィス
(タイ王国農業協同組合省畜産振興局の敷地内にある)



写真4: OIE SRR-SEAのオフィスでの1枚

・ 今後の研究、学生生活、キャリアパスにどのようにプラスになったか

筆者が、研究室で実験する日常からは得られない知見および経験を得たことは先に述べた通りである。無論、現在の研究テーマに直接貢献する成果は全く得られなかった。しかし、筆者が今後の基礎研究を遂行する上で、「感染症制御には何が必要なのか」、「国際機関の指揮官が何を考えているのか」、「どうすれば感染症制御に貢献する研究が出来るのか」、実験室でしか使えない机上の空論を展開しても意味がないことを理解出来たことは、研究の方向性を見失わないために「プラス」だったと考える。

また、感染症制御で旗振りをする執行機関での「リーダー」の良い姿勢を目の当たりにしたことは、「リーダーシップ」を考える上で参考になった。様々な意見や事情を持つ国々をまとめ上げ、ひとつの目標に向かわせる指揮能力は、学術的な知識のみならず、コミュニケーション能力や「人間性」等多岐にわたる。これは、筆者がいずれはなるかもしれない（？）「グローバルリーダー」のエッセンスであり、それを学ぶことが出来たと考える。これは普段の学生生活にも役に立つことに思えた。

・ 後輩へのアドバイス

国際機関で働くことは望まなければおそらくない機会、当該機関は学生だからこそ未熟でも短期間でも受け入れてくれる魅力的なインターンシップ先であると考えられる。ラボではないので勿論ピペットを握る機会がなく、机でのデスクワークのみとなり、科学者にとってはやや退屈ではあるに違いない。しかし、その分上記に述べたように得られるものは多分にある。特に、様々な国籍に人が従事する国際機関に訪問することは視野が広がる機会になる上に、多種（？）の英語にも適用出来るようになる。

本文内で筆者は、3ヶ月が最低プロジェクトを遂行するに必要であると述べた。それは、勿論 OIE-SRR で一つのプロジェクトを任されるのでそれへの貢献、達成感には十分に得られるが、国際機関の包括的な理解であれば1ヶ月で十分であると考えられる。

指導教員確認欄	指導教員所属・職・氏名 大学院獣医学研究科 動物疾病学講座 微生物学教室 教授 迫田 義博 印
---------	---

- ※1 電子媒体を e-mail で国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出するとともに、指導教員が押印した原本を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。
- ※2 インターンシップ先の担当者が活動内容を証明した文書（署名入り）を提出して下さい。
- ※3 本報告書はリーディングプログラムキャリアパス委員会で内容を確認します。その後、教務委員会で単位認定を受けることになります。

提出先：国際連携推進室・リーディング大学院担当

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp